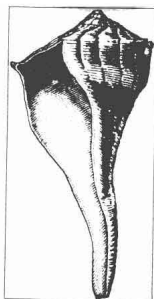


霧の聖マリ 辻邦生



中央公論社

霧の聖マリ

昭和五十年二月二十八日初版発行
昭和五十年三月十五日再版発行

著者 辻 邦生

発行者 高 梨 茂

印刷所 三 陽 社

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋二ノ一
電話(五六一)五九二一

振替東京二二三四

©一九七五 検印廃止

霧の聖マリ
目次

亡命者たち

7

雪の前雪のあと

33

女たちの館

59

落葉のなか

95

霧の聖マリ

119

北海のひとり

143

ロザリーという女

165

坂の下の家

183

鉄橋

209

帰ってきた人

237

燕のくる町

255

海のむこうからの手紙

281

あとがき

302

装幀

中島かほる

霧の聖マリ——「ある生涯の七つの場所」 1

亡命者たち

その頃、私が住んでいたのは、下町の市の立つ繁華な通りを上って、高台に曲ってゆく日かげになった路地で、車付き屋台を曳いた露店商たちが、そこでも野菜や果物や雑貨や花などを売っていた。市の立つ日は、私の住む路地も、通りからの賑わいが、さざ波のようにひたひたと押し寄せてきて、私がホテルの窓から見ていると、買物籠をさげた主婦や老人が、いくらかでも安い品を見つけようと、路地を行ったり来たりしているのであった。

私のホテルはそうした下町にふさわしいみすばらしい建物で、むろんエレヴェーターなどではなく、暗い細い階段を一階一階とのぼってゆくほかなかった。それぞれの階に二部屋あるだけで、

一つは通りに面し、もう一つは裏の中庭に面していた。私は表通りに面した部屋に住んでいたの
で、裏側の部屋のなかには知らなかったが、時おり紙屑を棄てに狭い湿った中庭に出ると、まるで
井戸の底から上を仰いでいるような感じがした。

狭いその空間に汚い建物の裏面が顔をつき合っていたわけで、いつも赤ん坊の泣き声や、女
の怒鳴り声や、甘ったるいラジオの流行歌はやりうたが聞えていた。そして夕方になると、安油で揚げる臭
いや、野菜をゆでる臭いや、赤ん坊の甘ったるい臭いが、重いねっとりした液体のように、苔の
覆う中庭の敷石のうえに、ゆっくりと流れおちてくるのであった。

ホテルの住人はほとんど半永久居住者ばかりで、ホテルという看板は出ているものの、一種の
下宿屋のようなものだった。私はそこに二年ほど住んでいたが、それが何ホテルであったか、名
前も記憶していない。おそらくホテルには名前がなかったのではないかと思う。ただホテルとい
う看板だけが、申し訳に、二階の壁から小さく路地に突き出ていたのだ。

管理人の部屋は玄関の奥にあり、昼でも人がいたことはなかった。大体客もなく、支払いも月
極めで、食事の世話もなかったから、管理人のやることは、週一度、部屋を掃除することぐらい
であった。管理人がどこかで油を売っていたのか、それとも内職でもしていたのか、いまだに
審つまびらかではないが、ともかく管理人が不在なので、私たちは気楽に深夜でも部屋に出入りできた。
むろん女たちの立入りは禁止されていたが、それは名目だけで、住人たちは、妻帯者でなければ、
恋人か、情人か、時には街の女たちを連れこんでいた。

當時の私の仕事はある会社の翻訳の下請けで、たいていは午前中に予定の分量だけを済ませ、午後それを会社に届けた。その会社の必要とする特許の記事の場合もあり、経済記事の解説の場合もあったが、労働に対する報酬は悪くはなかった。もちろんそれが私に十分な生活を保証してくれたわけではない。しかし当時、私は何よりも自由が欲しかった。拘束されずに物を考える十分な時間が欲しかったのである。

私たち住人は互にほとんど無関心であった。なるほど半永久居住者であるとはいっても、やはりホテルには違いなかった。そこではただ互に過ぎさつてゆく旅行者であることには変りなかった。彼らは葱やオレンジや兎の肉などを買物籠に入れてすれちがうようなときでも、どちらからともなく眼をそらし、そうした生活の匂いをつけていることを見まいとした。ホテルの住人たちは、それぞれが旅行者であることを自認し、それに反する行為があるときは、見て見ぬふりをするのが仁義であるようなところがあった。

私は路地を歩いていて、ホテルの住人をすぐ見別けることができるように思った。それは顔を見知らぬ人でもすぐわかるのだった。というのは、彼らは一樣に、何とも言えぬ孤独の影を曳きずついて、それはちょうど浮浪者のまわりに、耐えがたい異臭が漂うのと同じく、一種の孤独者の臭いといったものが、見えない長衣のように彼らを包んでいたのである。

もつとも互に見知らないといつても、ながい歳月のあいだには、訪ねたり訪ねられたりしないまでも、何かのきっかけで知り合つて、カフェで噂話の一つ二つかわすことはあったのだ。もつ

ともその場合でも、互に眼を見かわすことを避けるのと同じように、それぞれの仕事とか、過去とか、環境とかに触れることは暗黙のうちに避けられていた。私たちは天気のこととか、新聞に出てくる事件とか、近所のレストランの品定めとか、せいぜいその程度の話題で話をとどめていたのである。

ゲオルグという黒眼鏡の老人についても、関係は同様であつた。私が彼の名前を知っていたのは、たまたま路地を通りがかったとき、ホテルのまん前に屋台を出しているレモン売りの少女がレモンを老人に渡そうとして、後から「ゲオルグ、ゲオルグ」と呼んでいるのを聞いたからである。

その時、老人は何か考えごとをしていたらしく、少女の声には気がつかず、買ったばかりの夕刊を脇の下にかかえ、長い、重い外套を曳きずるようになつて、ホテルの入口へむかつて、斜に路地を横切っていた。私は娘が老人を呼んでいるのを見たので、足早に彼のうしろに近づき、その肩を叩き、「レモン売りの娘さんが呼んでいますよ」と声をかけた。

私はいまも、老人が肩を叩かれて、びっくりとして私を振りかえつた瞬間の、驚きとも恐れともつかぬ、仰天した顔を忘れることができない。彼は黒眼鏡をかけていたから、どんな眼の表情であつたか、わからない。しかし顔全体に現われたのは、一種の恐怖、あるいは驚愕といったものであつた。それは、いわば幽霊でも見た人のような、恐怖に凍りついた驚きが顔に一瞬刻みつけられたのだつた。

次の瞬間、彼は私を認めると、さっと不快の色を示し、ほとんど憤然とした調子で肩をそびやかした。私は私で、あまりのことに度胆をぬかれ、ただレモン売りの少女のほうを、それと指して教えただけで、彼から眼をそらした。私は、自分でうまく説明はできなかったが、そのとき咄嗟に、彼が見せたくなかったものを、見てしまった、という気がしたのである。

たしかにゲオルグは以前からその奇妙な性癖のために、他の住人より、私に強い関心呼び起していた。彼の威厳のある堂々とした恰幅や、一種学者ふうの尊大な幅広の顔は、彼の前身を想像したくなるような雰囲気を持っていた。

私をはじめてホテルに引越したとき、最初に私の部屋を訪ねたのは、このゲオルグだった。ドアをノックする音に、身のまわりの衣類やら、書物やらを片付けていた私は、ドアをあけると、そこに、半白の、幅広の、尊大な顔をしたこの老人が、黒眼鏡をかけて立っていたのだった。

「何かご用でしょうか？」

私は、誰か部屋を間違えて入ってきたのだな、と思いながら、そう訊ねた。

「あなたは……」老人は上背のある堂々とした体軀にふさわしい太い重々しい声で言った。「あなたはこんどこの部屋に入られる方ですか？」

「ええ、私はつい今しがた引越してきたところですが……」

私は老人の黒眼鏡を見ながら言った。そこに、私と、私の背後の乱雑な部屋が、小さく写っていた。老人は部屋のなかを無遠慮にじろじろ眺めまわし、それと私とを等分に引き較べているよ

うな様子をした。初対面にしては、なんとなく強引な、押しの強い感じがして、私はちょっと不愉快な印象を受けた。

すると、老人はすぐその気配を察したらしく、「いや、これは失礼しました。私はこの部屋の上に住んでおりましてな、私は夜なかに仕事をするものですから、音がして、あなたに迷惑にならないともかぎらない。そう思いまして、先手を打ってちよっとご挨拶に伺ったわけですよ」と言った。

私は老人がそう言っているあいだも、注意深く、部屋のなかを見まわしているのに気づいていた。しかし彼はそれ以上部屋のなかに入る気もないようだった。

老人が出てゆくと、私はなぜ彼が訪ねてきたのかと考えた。なるほど老人が夜なかに仕事をすることは事実かもしれない、その足音が薄い床板を伝って階下の私のところに聞えることがあるかもしれない。しかしそれが私の邪魔になるかどうか、そうなってみなければわからないし、また邪魔だといって、私が抗議しても、それが彼の仕事であれば、そう簡単にやめたり、変更したりできないはずである。

私はあれこれ考えた揚句、老人が私のところへきたのは、何かの理由で私をさぐるためではなかったか、と思った。

そう言えば、彼は嗅覚を働かすようにして、しきりと私の周辺をうかがっていた。まるで刑事が容疑者の周辺をあたるように、一種の職業的な素早い緻密な注意力で私の身のまわりを見てい

ったのだ。

いったいあの男は何者だろう。何のために私の身边を監視するようなことをしたのだろう——これが、それからしばらく私の頭にこびりついた疑問であった。

しかし彼はその後、私を訪ねることもなければ、しばらくのあいだは、私を見ても、そんなことなどまるで忘れた人のように完全に私を無視して行動していた。

私のほうは廊下や階段ですれちがうと、かならず挨拶だけはしたが、老人はまったくそれが聞えなかったような顔をしているか、時には、軽く頭をさげるか、する程度で、あきらかに私と關係を持つのを避けている様子だった。

私は彼がゲオルグという名前であることを知ってから、ひょっとしたら、老人はドイツ人か北欧人かと考えたが、言葉の訛から言うとは、どうも南欧人の感じであった。黒ずんだ古い外套や、すり切れた革の烏打帽などからは、そうした彼の故国を推測することは難しかった。ただ時おりレモン売りの女の子と話をしているときの様子に、どこか、身振りの派手なところがあって、南欧か、もしかすると南米あたりの出身者ではないか、と思わせるものを持っていた。

私はゲオルグがでこぼこした石だたみの路地をうつ向き加減にホテルに戻ってくるのを見ると、いったいこの老人は何で暮しをたてているのかと考えてみるのだった。彼は夜なかに仕事をするといったが、たしかに深夜、彼が机の前を離れて部屋を歩いているらしい音が聞えることがあった。私がおそく帰ってくると、まっ暗なホテルの窓々のなかで、彼の部屋だけは、カーテンの隅